

幼児教育における具体と思考



加藤常吉

幼児教育が具体的になければならないことはよくいわれる。この考えのおこりは児童心理学者のはたらきによることが多い。K・ビューラーは一九一八年「子どもの精神発達」を公にして、幼児の思考能力をことばの発達から説いている。幼児のことばとは、はじめに実物をながめ、それによって認知したものが実体のないときであっても、その理念に照らし合わせて、ことばが口にてでくるものであると説く。

それから凡そ十年おかれて、J・ピアジェは「子どもの判断と推理」(Judgement and Reasoning in the Child—英訳一九二八年)を公にして、この辺の消息をとりあげている。その要旨はつぎのように入える。

幼児の思考とおとなのそれとの間には根本のちがいがある。幼児の思考内容にはまとまりのつかないものと接近し合っているものとが同時に存在する。前者の領域では自己中心的欲求と想像とがフシ

ギもなくそのまま認められている。後者では思考がばらばらのまま統一体をなしている。論理的にはたいそう接近しているのであるが、思考が自己中心的であるためにことさらそれが整頓されていない。

これの客観性が生まれてくる年齢はだいたい七、八歳である。

ピアジェが幼児の思考を説くのに、いつも引き合いに出しているのは自己中心である。この言いまわし方は、幼児の思考が本質的にまとまりのつかないのが宿命であるかのような印象を与えないでもない。また思考の客観性の生まれる年齢をはっきり言いきっていることも、かなり大胆といえよう。

× × ×

幼児の理念が具体を通して形づくられていくことはたしかである。その意味でビューラーの説を認める。また幼児の思考生活では自己中心であること、この点でピアジェの説も正しい。

しかし、幼児教育の世界で問題になる具体には児童心理学者のと

りあげる態度と自らちがうものがある。それは、教育とは動的な私たちでおこなわれるものだからである。したがって、子どもにのぞむ態度には幅がある。この世界でとりあげられる具体とは、用語そのものから吟味される。ここにさしかかった読者はすでに気づいておられるにちがいないように、これは具体化でなければならぬ。

幼児教育ではこの「化」がことさら重大視される。

ともあれ、ものの具体化とは理念に到達することが容易でない場合の止むを得ない手段ともいえる。したがって、これは必ずしも高等なものではない。であるから、同じ心理学畑の人であっても、具体的思考についてはかなり慎重深くのべているものもある。ウエルナーもその一人である。ウエルナーのことを引用すれば「具体的思考 (concrete thinking) は対象的抽象作用……知覚形態から純粹でまた思想的抽象作用がまだ分化していない状態のものである」(1)と。このように、具体化することは思考のための便法にすぎないものという。この思考形態をウエルナーは次のように解釈している。「具体的思考作用は思考というよりも知覚から思考に入る過程での過渡的経験である……これは原始的抽象作用である。云々」(2)と。

註 (1) H. Werner; Comparative Psy. of Mental Development
(1940) p. 247

(2) H. Werner; Comparative Psy. of Mental Development
p. 234

もつとも、ここに引用したウエルナーの句の最後の箇所「原始的抽象作用」は文化発達の段階からながめたもので、幼児の場合はその精神能力におきかえて考えられなければならない。このことについてはおとで触れよう。

× × ×

幼児教育では絵画、数の実体、模型などが教材にとりあげられる。この具体とは具体そのものを認知させるのが目的でなくて、これを通してその背後にある理念を学びとらせることにある。このための具体化をはかる教育は必ずしも容易ではない。

とくに、今日のように子どもをとりまわっているめまぐるしい生活環境、機械化した文化、発達した視聴覚教育の時代にそうである。

これの運び方如何によっては思慮や判断の欠けやすい人をつくりあげられるおそれがある。なぜならば、これの効果の高い学習方法を選ぶかぎり、それにとりまわ感性度の高い刺激をうけ、そのために心のはたらきの積極性が失われるからである。つまり、その局面的現象にだけ心がひかされ、事態の因果関係の追求などをおこたることになる。この事実は今日の感性度の高いテレビをみている子どもたちのうちから二挺剣銃をもったベビーギャングや少年自動車強盗のでているのをみればよくわかる。

具体化教育では、これの目的が何であるかということが明確でなければならぬ。

交通道德をやしなうための例を考えてみよう。信号の模型をつく

って、道路の交叉点に立ったら、この赤信号のときには横切るんじゃないですよ、この青信号のときだけ進むのです。これだけであるとすれば、これは人の子の学習とはならない。テレビ番組の「名犬ラッシー」にでも教え込んだら、一回で立派な効果を与えるにちがいない。この訓練では青信号で行動をおこす条件反射の人をつくりあげるだけのことである。

具体化教育のねらいが具体の背後にある理念をつかみとることにあることはすでにのべた。しかし、それは学習での目標である。この教育の目的は子どもを思考を発達させることにある。したがって、抽象思考の能力のゆたかなものに、こと更に具体化の方法をとる必要はないといえる。

フランスを旅行した幼児教育に関心をもっている某氏の見学談につきのようなのがあった。パリの有力な幼稚園で朝の日課で、子どもは保育室に入るまえに廊下に三〇分ぐらいあぐらをかいて坐らせられ瞑想に入ると。そのスライドもみせて貰ったので、事実にはちがいはない。経験主義の教育を主張するものであれば、すぐにでも嘴をいれたいところである。だが、この保育を誰が絶対的に誤っていると主張できるであろうか。ただ、問題となることは秀才児を対象とする保育が一般化されているところにある。

フランスの保育者は、恐らく十六才で円錐曲線論を書き、射影幾何学の重要な定理の発見者であるバスカル、ダウインの思想的先駆

者で「動物哲学」をものしたラマルク、また今日では原子物理学者ボアを生んだ原動力である人間の純粹思考の発達を教育のねらいとしていることに、今も誇りをもっているにちがいないと思う。

この種の教育はお膝もとの日本にもあった。むかし藩校の漢学の師が六、七才の侍の子を前にして、四書五経を棒読みで教えたのなどはそのよい例である。まさかこの教育が棒読みの記憶だけを目標においていたものであったとは考えられない。それもこの教育では六、七才の子どもが端坐して師にのぞんでいる。この情景などはアメリカ流のインフォーマルの教授法では想像もつかないところである。師と一対一でのぞんでいるところも、いまあげたフランスの幼稚園の保育よりはより科学的であるともいえる。

具体をとりあげる教育で「化」を問題にし、ウエルナーの「原始的抽象作用」に賛成しなかったわたくしは、私自身の見解をのべなければならぬと追いつとめに追いつ込まれているようである。

この教育の対象となる子どもたちでは、個々の知性的能力が問題として大きくとりあげられる。高等な学習過程では、思考段階で知的作用が調整の役をつとめて、学習目標に到達させる。この作用こそ知性にほかならない。子どもの思考作用をゆたかにする学習で知性がどのようなかたちで活用されるであろうか。これには多く仲介物が用いられる。ことばまた文字がそれである。幼児の場合前者の占める位置はとくに大きい。

原始社会でなくて、今日の社会で生活している子どもたちにとって、理念の世界で意味合いが構成されるために仲介されるこのことばは、また、思考をはたらかせる動機——実際は刺激となつてはいつてくる——をつくっている。したがって、保育の面からいえば、これのとり上げ方はその学習目標の到達を左右するほど大きな性格をもっているといえる。

ちかごろはダンブカーが列車に衝突してよく事故をおこす。そこで、交通道德のとりあげ方を考えてみよう。教諭が赤信号の模型を示して、これのでているときには踏切りを横切つてはいけませんよという。知性の高い子どもであれば、なぜだろうかの問いがおこる。関心を払いたいところは、この問いがおこるかおこらないかである。というのは、この問いは知性にもとづく学習の基本となるものだからである。この子どもであればつづいて思考をはたらかせる。そして、この答となるものは、もし横切つたらどうなるかにかけられなければならない。

こうして、この学習段階の山にはいる。交通道德の学習目標であるかぎり、子どもにおこってきた「どうして」の問いは、対人関係で処理されてこなければならぬ。つまり、もし横切つたら自分が危険におちいる、であつてはまだ不十分である。それは他人に大きな迷惑をかける、を思いあてるのでなければならぬ。ここではじめて交通道德が理念として把握される段階にはいる。

この学習過程でわかるように、具体また思考の訓練にとりあげら

れることばの程度は、個々の子どもの知性度によってきめられるもの、いわば、知性の尺度に相当するものである。

知性のひらめきの低いものであつては、赤、青の信号の模型を示してことばによる示唆を与えたからといって、この学習の目標段階にのつてこないこともある。その子どもにはダンブカーが信号を無視して横切つたためにおこした実例の写真、つまり、運転手が犠牲になつただけでなく、電車何輛かが投げだされ、乗客の多くの死傷者をだしたむごいものをみせてやるのもよい。

しかし、これは感性度の高い具体化なので、知性の高いものにはわかりきつていふという反感をおこさせるであらうし、感性性の強いものには恐ろしさを植えつけよう。またオッチョコチョイの者には、何かのかたちで好奇心をそそいでいるにちがいない。それほど具体化教育は、とりあげ方如何によつて危険性をはらむものといえる。そのねらいが理念の世界で把握され、また思考の訓練を目ざしているこの具体化教育が達成されるためには、ある物的条件が認められなければならない。その一つは時間であり、もう一つは空間である。これらの条件をよりよく整えることによつてこれの効果が期待される。その公式は次のようになる。

学習過程の公式
時間 × 空間 × 学習目標 × 学習方法 × 学習環境

時間については、徐々に短縮されていかなければならぬし、空間については、これも縮小されていかなければならぬ。これをはかるためのカリキュラムの立案がたてられることである。